

琉球病院 Monthly



独立行政法人
国立病院機構 琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.09
2013 September

発行者 琉球病院事務部長
藤田 博文

院長

村上優 (むらかみ・まさる)
1949年生まれ
74年九州大学医学部卒業。
86年国立肥前療養所精神科医長。2002国立肥前療養所臨床研究部長、
同年King's College London Institute of Psychiatry (司法精神医学研究所) 長期研修。
2005年花巻病院臨床研究部長 (併任) を経て、2006年琉球病院院長に就任。
日本司法精神医学会理事、日本アルコール関連問題学会監事 NGOベルヤル会の副会長として活躍。



基本理念

この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

重症心身障がい病棟について

琉球病院には80床の重症心身障がい病棟があります。その病棟は、いわゆる「動く」重症心身障がい児・者の方々のために設けられています。身体的障害を合併していなくても、著しい行動障害(興奮、他害、徘徊、自傷、自閉的傾向、異食等)のため社会適応が難しく、家庭での生活が困難な重度精神発達障がい児・者を入院対象とし、適切な医療、看護、療育を行い、身体症状への介入、情緒の安定、基本的な生活能力の維持・向上、生活の質の維持・向上を図っています。中には行動異常が著明なために一般精神科病棟では長期保護室を使用せざるをえない方が、この環境で改善することも多く体験します。

当院の重症心身障がい児・者病棟(以下当病棟)は、医師、看護師、療養介助員、看護助手、児童指導員、保育士、医療ソーシャルワーカーなど多職種のチーム医療で運営しています。それぞれの職種が多面的に利用者の方々と向き合い、連携して支援を行っています。利用者の生活行動全般をこまやかに観察して状態像の把握を行い、必要に応じた薬の服用などを支援し、生理的基盤を整えます。精神科的疾患だけでなく、内科的疾患への介入も行います。生理的基盤の睡眠・食事・排泄の安定・維持など生活リズムを整えると行動障害の緩和へ繋がりますといわれています。

またスタッフは、利用者とは対人関係の基盤を作り専門的アプローチを行います。医療、看護、療育的な支援を通して、利用者の方々の生活を様々な角度から支えています。医療機関や施設等で不適応を起こされている重度知的障害をお持ちの方など、当病棟への入院を希望される方は、下記担当者までご連絡下さい。現在、入院待機の方を募集しております。

療育指導室 主任児童指導員 守山公基

診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・物忘れ外来
- ・アルコール依存症等外来

病床数 406床

- ・精神科病棟 181床
- ・認知症 50床
- ・アルコール 54床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障がい 80床
- ・医療観察法 37床



●アクセス
路線バス/那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス「77番名護東線」浜田バス停下車徒歩3分
自動車/那覇市から40分
沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

トピックス

行事・出来ごと

- 病棟等建替整備の動き
 - 進捗状況
 - 準備工事：駐車場整備工事完成、中病棟解体工事完成
 - 本体工事：請負業者 電気設備 … (株)九電工
機械設備 … (株)三建設備工業
- 平成25年9月17日(火) 建築工事 …入札予定

教育・研修

- 東北支援活動報告として『震災ころのケアのかけはし』の発刊準備中
- 発達障がいに関する研修会 平成25年9月21日(土) 琉球病院研修棟 定員50名(先着順)
講師：瀬口康昌先生・辰野陽子先生(肥前精神医療センター)

震災ころのケアのかけはし



● 地域医療連携室だより

・活動状況 当院外来待合室(薬局前)に「アディクション(嗜癖)自助グループ情報コーナー」があります。アルコール依存や薬物依存、ギャンブル依存症等の自助グループから定期的に届くレターを綴っており、どなたでも閲覧できるようになっています。病気を回復させるために日々努力している方の体験談は心を打つものです。是非、ご覧下さい。

お問い合わせ時間
8:30~17:15(土・日・祝日以外)
TEL:098-968-2133(代)
内線:231・234
FAX:098-968-7370
地域医療連携室直通



空床状況

精神科病棟 4床	認知症 1床	アルコール 3床	児童思春期ユニット 2床
-------------	-----------	-------------	-----------------

8月20日現在

※ 入院予約に関するお問い合わせは地域医療連携室へご相談下さい。

治療抵抗性精神疾患への医療



クロナジンの治療状況

治療抵抗性統合失調症に対して、平成22年に1例目の投与を開始し、全症例は91例となりました。平成25年7月の新規導入は2例で、治療経過も良好です。退院数も30例近くになりました。

m-ECTの治療状況

当院では、県立北部病院麻酔科のご協力の下、m-ECTによる治療を行っております。平成25年7月の治療実績は7例であり、各症例とも改善傾向が認められております。

こども心療科

沖縄県児童思春期診療整備事業の一環として、去る7月27日に昨年に引き続き針塚進先生（中村学園大学教授）を講師にお招きして、動作法研修会を開催しました。前半は「心と身体をつなぐ動作法」というタイトルで講義をいただき、心と身体の間を動作を通して教えていただきました。また、動作法でのコミュニケーションや自己コントロールの方法について講義と実技を通して学ぶことができました。特に、発達障がいの子どもたちへの実践的なアプローチ法として動作法の有効性を実感しました。参加者は学校教諭、施設職員、保護者など実際に子どもたちにかかわる関係者の方々にご参加いただき、役に立ったという意見が多く、充実した研修会になりました。9月はASD、ADHDなど発達障がいに関する研修会を予定しています。

【研修会のお知らせ】

日時：9月21日（土）13：00～ 場所：琉球病院研修棟 定員50名（先着順）

講師：瀬口康昌先生・辰野陽子先生（肥前精神医療センター）

【申し込み・お問い合わせ先】 kenshu-child@ryu-ryukyu.jp 野村

認知症医療

<認知症治療薬について>

認知症の治療薬として、主にアリセプト（ドネペジル塩酸塩）がこれまでは使用されてきました。最近では、メマリー（メマンチン塩酸塩）や、貼付タイプのイクセロンパッチ（リバスチグミン）、口腔内崩壊錠のレミニールOD錠（ガランタミン）など、より多くの新薬が採用され、患者様の状態に合ったお薬が処方されるようになりました。

入院当初の患者様は、これまでの環境との変化に戸惑い、BPSD症状が一時的に悪化する場合がありますが、薬物療法と患者個別に合わせた看護・介護ケアの提供により、徐々に症状も改善し、穏やかに入院生活が送れるようになっていきます。

認知症の薬物療法について、何かご質問等ありましたら、お気軽にお問い合わせください。

重症心身障がい医療

平成24年4月より療養介護サービスへと移行し、介護区分調査のため各市町村の方々と関わる機会をもつことができました。これは、地域の方々と共に利用者の療育を考える第一歩だと感じ嬉しく思っています。また、平成25年4月からは2名の療養介助員が配置され、日常生活の援助（食事、口腔ケアなど）や摂食、嚥下訓練などケアの向上に繋がるものと期待されます。中庭でのプール遊びや院外でのカラオケなどの療育活動も幅が広がってきています。看護においては、タクティールケア（触れるケア）で癒しを提供し、構造化による指導（TEACCHプログラム）や行動療法で混乱のない生活が送れるよう支援しています。これからも利用者の個性を重視した支援を目指していきます。

アルコール・薬物依存医療

アルコール依存症の新しい治療薬「レグテクト」が平成25年5月27日に発売となり、3か月が経過しました。レグテクトは、アルコール依存症者の強い飲酒欲求を直接和らげてくれる作用があります。主な副作用は軟便で、腎機能が悪い方には使用制限がありますが、肝機能が悪い方にも使用できます。アルコール依存症の多くの方に肝機能障害の合併がありますが、このレグテクトはそのような方々にも使用できます。

当院では平成25年8月現在、外来通院の患者様21名、入院中の患者様6名の方が服用されています。断酒を志して内服している方は「飲酒欲求が軽減した」と話され再飲酒の抑制につながっています。断酒が困難な方は、ぜひ当院の外来に受診し相談して下さい。

包括的地域精神医療（ACT）

残暑が続く、毎日30度を超す暑さに担当訪問看護チームも体調管理に苦慮しております。訪問看護利用者様の猛暑での過ごし方について個別に対応を行っております。8月は、旧盆もあり、利用者様もご先祖様の供養で忙しくなり訪問件数が減る月になります。地域の行事に参加し、家族の一員として役割を果たせる利用者様もおりますが、人が集まる場所に飲酒ありきで病状への影響や生活リズムが乱れる利用者様もおられます。また、体調悪化が病状を左右する場合もあるため、十分な休養を取る事、熱中症対策等にも気をくばりつつ夏場の訪問看護を行っています。

臨床研究部の活動状況

【総合病院における問題飲酒者の状況】

当該総合病院を受診した方に対し、治療者、当事者、家族の判断でアルコール問題があり、飲酒の低減を要すると希望する者とその家族を対象に相談業務を実施しました。依頼のあった59名の方にAUDITを実施した結果、68%にアルコール依存症が疑われる、またはアルコール依存症が進行したハイリスクな層（AUDIT20点以上）でした。このことから、総合病院でのアルコール相談はアルコール依存症者の早期発見・早期治療につながる可能性があることがわかりました。

